Repenser notre relation avec l'Afrique des Pauvres au Troisième Millénaire

21世紀のアフリカとの接し方

Willy L. TOKO, Ph.D. Candidate
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo
Journalist, NHK WORLD RADIO JAPAN

Content

- はじめに：転換期
- 1.見えやすい「アフリカ」
- 2.見えにくい「アフリカ」
- 3.氾濫する「アフリカ・エキスパートたち」
- 終わりに：一歩下がる

はじめに：転換期

- 脱原発か否か
- 洪水・津波・旱魃（自然との調和）
- 経済危機（暴動・アラブの春・失業率）

1.見えやすい「アフリカ」

- 1.1.Trademarks of the African Child
- 1.2.見えやすい「アフリカ」
- 1.3.風評と経済的ダメージと自尊心

1.1.Trademarks of the African Child

On train cars and platforms in Tokyo plenty of advertising materials appeal to the senses of riders. Politics, fashion, food, health, pop music, English schools, business, etc., all sectors of the society agglomerate together, so to speak, in the railway service.

In the morning trains are generally packed, but soothingly silent. The gaze easily stops at a beautifully designed poster conveying interesting information. Peace of mind at these early hours of the day is sometime disturbed. Some messages and pictures are just too shocking! This might be a star's death or something of the like.

I am always puzzled in front of charity posters for donations! Many of them will show an emaciated "African" child. I usually turn my eyes away, asking deeply myself if this is the sole way to collect cash for the needy or, even deeper, if by so doing real issues of poverty are genuinely being addressed and solved. No wonder such posters became the "trademarks of the African child" in Japan!

1.2.見えやすい「アフリカ」

今途上国や世界の周縁部で、多くの子どもたちが、「生きることを奪われる」。それは、戦争の被害、飢餓、乳幼児死亡などの場合である。このケースでは、世界各地の惨状が、新聞、テレビ、雑誌でしばしば紹介され、ショッキングな写真で、世界の目を強く引き、同情心を煽ることも少なくない。問題は見えやすい。（戸田、2009：008）

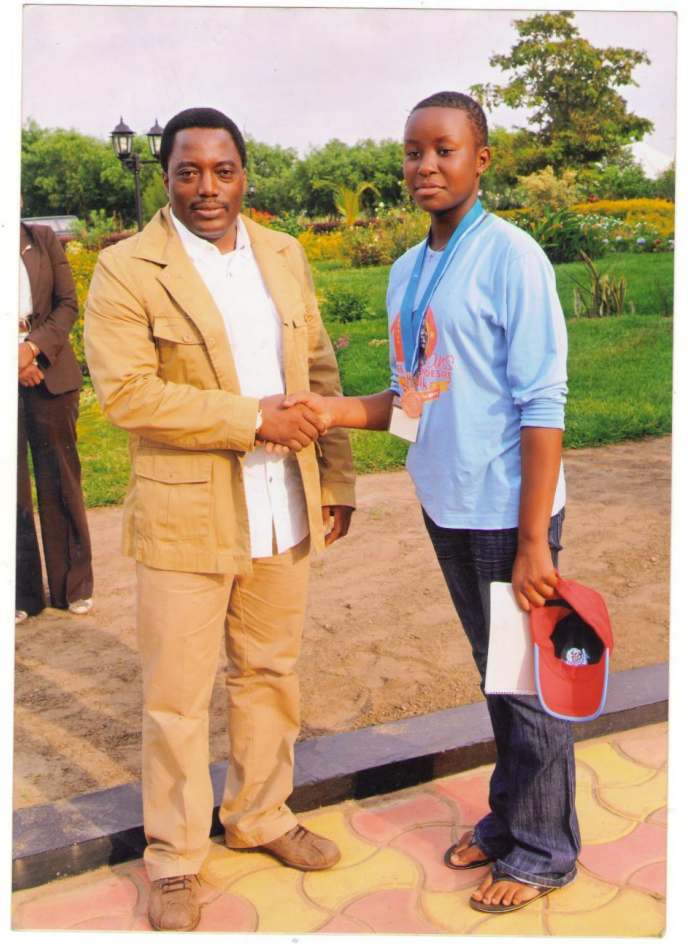
1.3.風評と経済的ダメージと自尊心

コンゴ現役大統領と全国詩（文学）大会の最優秀賞をもらった女子高性。彼女は特に裕福な家族に恵まれて生まれてきたわけではない。自尊心に溢れている

以外と「平和以外なんでもある国」と元国連職員（米川正子：2010）と書かれたコンゴには実際には、

多くの子どもが自身を持っていきている。逆のことも否めないが・・・

風評と貧困と人々の自尊心をどう考えるべきか今世紀の我々一人ひとりの重要な課題のようだ。



2.見えにくい「アフリカ」

- 2.1.フィクションの「アフリカ」
- 2.2.身近な「アフリカ」
- 2.3.援助対象の「アフリカ」

2.1.フィクションの「アフリカ」

http://www.fondsocial.cd/bas_congo.php

- 多くの子どもたちが「苦しみにたえて生きている」。それは児童労働、ストリート・チルドレン、強制売春の少女、子ども兵士などで「働く」子どもたちや、奴隷的状態で性的虐待を受ける子どもたちである。これらのケースは日常的に関するものなので、あまりショッキングな形で報道されることはない。
- あるいはその多くは「闇の世界」に関することなので、一般紙やテレビなどでショッキングな形で報道できるものでもない。そのショッキングな場面は、通常、小説や映画でフィクションとして提示される。
- 闇の世界を小説の叙述や映画の映像で垣間みるとき、人々は、同情心よりもむしろ恐怖心を覚えてしまう。問題は見えにくい。[戸田:2009]

2.2.身近な「アフリカ」

- 我々と同じ国に住む「アフリカ人」
- 彼らはしばしば遠い存在とされがち
- それは正にフィクションの「アフリカ」をノン・フィクション化している

2.3.援助対象の「アフリカ」

- 同情心：「アフリカ」を見えやすくする
- 驕り：「アフリカ」を見下すケースも
- はては、「アフリカ」が見えにくいまま

3.氾濫する「アフリカ・エキスパートたち」

- 3.1.現場主義：百聞は一見にしかず
- 3.2.「アフリカ」は静的な世界
- 3.3.エキスパートたちは現地人リーダーより「アフリカ」をよくするという意識

3.1.－3．2．－3．3．を凝縮する主張の事例

- アフリカの根本的な問題が「部族」に起因しているとする福井聡（1996年）『アフリカの底流を読む』ちくま新書の次の記述に注目してみよう：「アフリカ経済はなぜ低迷を続けるか。人々はなぜ貧しいのか。それとも西洋的な豊かさを求めることは間違いなのか。（…）選挙の取材でやってきたアンゴラの首都ルアンダ。建物は古く、町は埃っぽいホテルの部屋は窓枠が壊れ、東京への電話はつながらない。会見や約束が守られず、飛行機は六時間遅れた。（…）米国人記者が同じことを尋ねた。『アフリカはなぜうまく行かないのか』と。（…）質問を受けた欧州人の彼がまず上げたのは、『植民地時代の搾取の負の遺産』という使い古された常套句。さらにアンゴラのような東西冷戦に巻き込まれた歴史の皮肉を上げ、その後言葉を濁し始めた。『私は人種差別主義者ではなりたくないが・・・・永年アジアで暮らした経験からすると』として、アジア人はボールペンのインクが切れたら芯のみ取り替えて再度利用すること、車やバイクが故障してもなんとか動かそうと懸念に修理すること、わずかな所得品を元に商売を始め生き抜くことなどを列挙し、アフリカでは機械は一か所でも壊れたら廃棄してしまい、難題に打開策を講じる粘り腰のなさを突いた。こうして欠点をあげるのは、差別主義になるのだろうか。それとも『すべて効率的に』という観念に囚われ過ぎた先進国の傲慢なのだろうか。（…）アフリカに何を求めればよいのか。この大陸はなかなか答えを示してくれない」（福井1996：074）

終わりに：一歩下がって

- 「いずれにしろここで確認しておきたいことは、私たち先進国に住んでいる人間の生活レベルをこのまま向上させながら、同時に第三世界の人たちの生活レベルを私たちと同じレベルまで引き上げることは夢物語であるということです。つまり『援助』の本質は、『かわいそうな貧しい国』の人たちの暮らしを、我々のような『豊かな』生活に変えることではない。」（菊池功2005：63）

- 「ケニアナッツ社はナイロビ郊外に三つの工場を持ち、季節パートを入れて1500人が働く。それに国内五ヶ所の農場を加えると、恵4000人の従業員を雇用する。佐藤は『うちの従業員の質はケニアで最高だと思います』といった。すぐれた人材だけを採用しているわけではないし、とりたてエリート教育をしているわけでもない。「怠慢はいない。その変わり真面目に働けば給料はきちんと払うし、昇給もある。』そんな当たり前のことを根気よく教え、実行しているだけなのである。アフリカの各地で、自力で生活の向上をめざそうという民衆レベルの動きが始まっている[…]。そんな動きに私たちはどうかかわることができるだろうか。

終わりに：一歩下がって

- 政府の代わりに援助団体や国際機関が国を運営していくことで、現地の政府・政治体制づくりが衰退していくに違いない。はてはもちろん、よその国々のポップスターが新たな植民的な構図を生み出していくのだ。永遠に他人の下による構図は再生されてゆくのだ。それでは「発展」や「平和」が根付くはずがない。「開発」でも、「平和構築」でもそうだが、「アフリカ側の主体性を活かしながら、外部からいかなる関与が可能なのか。試行錯誤の中から模索するしかないが、それにお時間がかかるだろう」[1]とい武内進一(2009:162)は指摘しているが、リビアへの関与によって露わになった『国際社会』、つまり各大国の国益や思惑による混乱や不一致は今後の課題であるに違いない。「止血」という緊急措置は「真の平和」に繋がるかが大問題。リビアはすぐに平和になるとは考えにくい
[1] 武内進一「アフリカの紛争解決に向けて―国際社会の関与とアポリア」JCAS REVIEW, Vol.9. No.1, 148-67

- こういった諸問題が今世紀こそ、「難しい」と言われず、むしろ直視される時期、否、転換期が来ているのではなかろうか。

ご清聴ありがとうございました